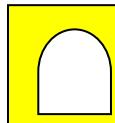


日吉台地下壕保存の会会報



第152号
日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会会報 150号超の歴史

副会長 亀岡敦子

2022年6月17日に、当会の会報150号が刊行されました。それは1989年5月10日の会報第1号発行から33年目のことです、同年4月8日に発足した、日吉台地下壕保存の会結成総会の内容を報告したもので、初代会長永戸多喜男氏（慶應義塾大学名誉教授仏語・仏文学、経済学部）の「会長挨拶」は、阿久澤武史会長が、かつて会報に引用されたように、会の結成理念を掲げており、常に私たちが立ち返るべき原点と言えるでしょう。

会長挨拶中段から引用すると、「慶應義塾教職員有志、空襲下の日吉で生きた人々、旧海軍関係者、地域で子供たちの教育にたずさわる教師たち、きわめて穏和だが、平和への熱い思いを胸に秘めた周辺の市民が、一つの目的のために、この会を結成したこと自体、数年前に地下壕調査を思い立ち、細々と活動を続けてきた私たちにとっては、当初は夢にも考えなかつた画期的な出来事です。そして会の結成が画期的であればあるほど、会に加わる私たちの責任は重いのだと言わなければなりません。」とあります。結成に参加し、幹事会や事務局を担ったのは、慶應義塾教職員や町内会長ほかの一般市民で、それは現在の運営委員会の構成と変わっていません。そして永戸氏は、その市民である私たちには重い責任があるのだと、言い切っています。

発足時からの10年間の寺田貞治事務局長を始めとする会の活動は、目を見張るものがあり、長靴を履いての地下壕見学や、神奈川県や横浜市への働きかけも積極的に行われました。1992年には会員は438人と急増し、年々運営委員も増えました。また、1997年の戦跡保存全国ネットワーク結成には中心的役割も果たしました。しかし、結成から10年も経つと、多忙な中での会議出席や活動についての考え方の違いなど、軋みが出てきました。その軋みも会報に隠さずに載せました。そしてどんな状態であれ、年に4、5回の会報発行と、春の総会は必ず開催しました。文章にすると冷静になれるようです。そんな時、学徒出陣し、病を得るまでの数か月間軍隊生活を経験した永戸氏や、多感な十代を戦争の中で過ごした鮫島重俊氏（慶大名誉教授英語・英文学）と東郷秀光氏（慶大名誉教授英語・英文学）が、搖るぎなく持っている二度と戦争を起こしてはならないという強い信念が、私たちの位置を修正してくれたのではないかと思います。

当会は33年間で、永戸多喜男・鮫島重俊・寺田貞治・大西章・阿久澤武史氏の5人、会長が変わりました。みな先頭には立っていましたが、頂上にはいませんでした。そもそもこの会には頂点も底辺も必要ないのです。そんな会でありたいと願うのは、「必ず総会を開くこと。必ず会報を発行すること」という結成時の、先見の明ある人たちの「約束」だったのではないでしようか。

【目次】

- 巻頭言【1p】 日吉台地下壕保存の会会報 150号超の歴史 副会長 亀岡敦子
会報150号を記念して(1)【2-5p】(2)は次号以降に掲載
 (執筆者: 敬称略) 阿久澤武史、渡辺賢二、東海林次男、水野次郎、横山勝、
 町田真実、平田東助、川口重雄
寄稿【5-6p】 桜花を捧げる知覧高等女学生の写真に思う 副会長 亀岡敦子
新聞記事【7p】 慶大地下に眠る旧海軍施設 (神奈川新聞)
聞き取り【7-11p】 日吉の連合艦隊勤務、上野賀平さん 運営委員 山田 譲
感想文【11-13p】 ★長野先生クラス地下壕見学会 長野智佳
 ★新米ガイドの決意 小野由紀 ★ガイド養成講座を受講して 矢野俊秀
報告【13-14p】 新たな記録・伝承方法として3次元モデルをためして
 会員 中田 均
追悼文【15p】 海軍通信兵 近藤恭造さん 運営委員 遠藤美幸
活動の記録【16p】 2022.9月～11月

会報 150 号を記念して（1）

10年後の保存の会

会長 阿久澤 武史

会の発足から33年、会報は152号となりました。私が会長になったのは2015年ですから、長い歴史の中のほんの僅かな時間でしかありません。会員の皆様のご理解とご協力に支えられていることをいつも感じています。10年後の会報はどのようにになっているでしょうか。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と言ったのは宮沢賢治です。私たちは戦争を通して平和の意味を考えます。いつになってもその思考回路から離れることができません。世界から戦争がなくならない現実は、実に悲しむべきことであり、賢治の言う「個人の幸福」になかなか近づくことができません。10年後、私たちはどのような言葉で地下壕を語るのでしょうか。会報にはこの会が歩いた道がそのままに残されています。回り道や寄り道もあったでしょうが、平和な社会を求めるという点では、一本のまっすぐな道です。これからもこの国や世界の動きをしっかりと見つめながら、前に向かって歩いていきたいと思います。

日吉台地下壕保存の会のさらなる発展を！

会員 渡辺賢二

私が最初に日吉台地下壕を見学したのは1980年代後半でした。その頃、全国で戦争遺跡保存運動が展開されていました。法政二高で教えていた私は同僚で、蟹ヶ谷地下壕（海軍の通信隊）を調べていた新井揆博さんと一緒に、慶應高校で教えていた寺田貞治さんの案内でコンクリート製の立派につくられていた連合艦隊地下壕を見学しました。そして1989年には正式に日吉台地下壕保存の会がつくられ今日に至っていると思います。慶應高校時代こうした活動に参加した都倉武之さんは現在では慶應大学で、法政二高時代参加した齋藤一晴さんは日本福祉大学で教鞭を執っています。私も皆さんと一緒に最初の時期に慶應大学の白井厚さんの監修で平和文化社からガイドブックを出版したりする活動に参加しました。

その後、私は登戸研究所の保存運動に参加し、明治大学平和教育登戸研究所資料館の設置に関わり今日に至っています。日吉台地下壕保存の会は慶應高校の先生を責任者として亀岡敦子さんや喜田美登里さんなど地元の人たちが精力的に活動されています。さらなる保存と活用がなされることを期待します。

会報 150 号越え、おめでとうございます

会員 東海林 次男

「日吉台地下壕保存の会会報」は大事に保管しているはずだった。ところが、第24号（1993年9月）～第57号（2001年4月）、第126号（2016年7月）～第151号（2022年9月）は見つかったが、第58号～第125号が行方不明である。古い号はB5判。

日吉台地下壕を知ったのは、「日吉台地下壕（旧連合艦隊司令部跡）潜入ルポ」（東横沿線を語る会編『とうよこ沿線』NO.56 1992年 所収）だったと思う。その後、しながわ平和のための戦争資料展実行委員会主催で日吉台地下壕見学会を企画し、1993年4月25日、寺田貞治先生に案内・説明していただいた。その時は川崎平和館も見学している。それとは別に、数回、見学会や戦争展でお世話になった。

2001年2月11日、かながわ県民センターでの田中伸尚さんの講演を聞くため、東横線で中目黒から横浜へ。日吉駅を発車して間もなく、右手に急斜面を削って地肌を露わにしている工事個所が目に入った。そこに横穴の天井部のカーブがはっきりと見えた。それが気になって1週間後の2月18日、現地を訪ねた。それがきっかけで、海軍省艦政本部地下壕に単独で2回もぐりこむことになった。そのことを会報の何号かに掲載していただいたが行方不

明でわからない。入口に面したお宅の1914年生まれの川田さんには大変お世話になったこと、壕内の通気口の鉄管や金属蓋、田園調布から運んだ大谷石の転用など、いまでも印象に残っている。思い出だけになってしまったが、貴会の益々のご発展を願っている。

地下壕保存活動に感謝します

会員 水野次郎

「日吉台地下壕保存の会会報」が151号の刊行を手にして、地域の皆様方の「戦争遺跡保存」に対する、永年に亘るその情熱と活動には頭の下がる思いでいっぱいです。ありがとうございます。

この活動は又、「ノーモアヒロシマ」を合言葉にした全国規模に発展した戦争の非業・愚かさを反省材料にした、二度と戦争を起こさないための平和希求の市民運動でもあったと思います。

私の住む日吉地域の一角に、それも日本海軍の総司令部が地下に建設されていたとは、夢にも思っていませんでしたが、その存在を知り、併せて戦火に散った若い学生諸兄の御靈に合掌し、平和のありがたさを実感致しました。

然しこの処、戦後80年も経ぬ折にもかかわらず、日本の周辺にも戦争の臭い、原子力戦争の危険を感じさせます。私達も如何に受け止め、平和な世界を維持出来るかを真剣に受け止め、考えたいと思います。

日吉台地下壕保存の会の活動に思うこと

会員 横山 勝

私が日吉台地下壕のことをはじめて知ったのは、帝国海軍連合艦隊の旗艦の表を見ていて、最後は大和型二号艦の武藏、日本の敗戦濃厚になって、戦艦を後方に置いておけないと、1944年5月に軽巡洋艦大淀、そして1944年9月には、日吉台地下壕と書いてあったのを見たときだったと思います。

当時の方も、陸地に連合艦隊旗艦があると聞けば、それは末期的症状と思っていたのではないか、と思いました。

亡き私の父も、その頃慶應・三田での生活から予科練に志願し、愛知の岡崎で訓練を受けたそうです。1945年3月に訓練を終え、千葉・館山の航空隊に向かうところ、東海道線で足止め、それが東京大空襲の混乱で、やっと電話がつながった館山の航空隊では、入るはずの兵舎が焼けてしまい、急きょ青森・大湊のまだ雪の残る海軍基地に向かい、そこで艦砲射撃などを経験し、8月15日を迎えるのですが、東京大空襲でその父、私の祖父を亡くしていた連絡がその間あったと聞きました。

日吉台地下壕保存の会主催の見学会で、私は、初めてその父と日吉台地下壕を見せていただきましたが、父は私以上に思うところがあったようです。

私は長く家庭裁判所で、法律違反をした未成年者と接していました。横浜（石川町）や霞が関の勤務のとき、少年友の会というボランティア団体のお力を借りることが結構ありました。少年友の会は、家庭裁判所の単位ごとにつくられていて、全国で50の会があり、先日は全国大会（50の会の連絡会総会）が行われました。

私たちも意欲や熱意をもって、そうした未成年者の更生に努力していたことは間違いないありませんが、理念を強く持っているとしても、そうした「仕事」として接している者と比べ、立場が若干不安定だけれども、別の理念、意欲、熱意をもって、接してくださるボランティアの方の存在は、未成年者やその保護者に、大変良い化学反応を起こしてくださるようなことを何度も体験いたしました。

私は家庭裁判所退職後、一時区立図書館の館長を務めましたため、行政がどんなことを考えているかも少しわかつてきました。行政が怠けて、すべきことをしないのでは困ります

が、一方で、残念ながら、行政には「できないことがある」ことを実感するのもまた実際でした。私は、日吉台地下壕保存の会は、まさに私が経験してきたようなボランティアとしての理念、意欲、熱意などをもって、行政ができないことに、日々尽力いただいている。私は、このような活動をずっと続けておられる皆さんに深く敬意を表するとともに、そのことがきっと素晴らしい化学反応になっていると思っており、今後もご指導いただけるようお願いしたいと考えております。

「日吉台地下壕保存の会会報 第150号」の達成、おめでとうございます 会員 町田真実

1989年5月10日の第1号から2022年6月17日の第150号までの長きにわたり、途切れることなく発行し続けるということは本当に大変なことだと思います。自分に当てはめ、1989年当時短大生だった私に子供が生まれ、その子が今年大学生になったと考えると継続し続けることの重みと月日の長さを実感します。

しかも「会報」の中身が毎回濃く、執筆されている皆様方の想いがとても伝わってきます。ロシアがウクライナに侵攻している現在、印象深く思い出されるのは「会報 第139号」（2019年7月25日発行）の巻頭言、阿久沢武史会長の「戦争しないとどうしようもないのか」という玉稿です。阿久沢会長のおっしゃるように、大事なことは考えることだと思います。これからも「会報」から戦争や平和について学ばせていただき、思考を停止することのないようにしたいと思います。

日吉台地下壕見学会に参加して

会員 平田東助

私は長崎県の出身であり、子供の頃から戦争（原爆）との関係が深く、歴史の授業や行事等で様々な情報が入ってきた。また私の叔父である秋月辰一郎氏は被爆直後の長崎原爆病院の院長であり、被爆後の長崎市で尽力した人である。叔父から多くの原爆投下後の話を聞くことができていた。長崎原爆資料館には叔父がサインした死亡診断書が展示されている。さらに私自身が被爆二世ということから戦争に関係がある内容について人一倍興味があった。

「日吉台地下壕保存の会」を認識したのは平成15年頃であった。亀岡さんの紹介により入会し、すぐに地下壕の見学会に参加した。その時の胸が締め付けられるような感覚は今も忘れるることは出来ない。併せて感じたのは、実際の連合艦隊司令部の配置（地下壕内）についてVR等で再現してもらって、もっとリアリティが出るようにしてもらいたいという事であった。確かにアンケートには記載したように覚えている。帰路につきながら、私も何かお役に立てるとは無いかと考えていた。

日吉台地下壕見学 22年の歳月は流れ

田園調布学園前教員 川口重雄

今から22年前、2001年8月の歴史教育者協議会第53回全国大会が横浜市で開かれた。その現地見学会で、私は初めて慶應義塾日吉校舎の地下に延びる壕に入った。ご案内は新井揆博先生。明日からでも使えそうなくらい頑丈に造られた壕の、戦時中の土木技術に驚くとともに、これは生徒に見せたいと思った。新井先生に生徒・保護者を対象とする見学会を実施したいとお伝えすると、先生は快く応じてくださった。

翌02年3月から田園調布学園高等部3年生・保護者（希望者）を対象とする日吉台地下壕見学会が始まった。1989年から始めたGHQ本部のおかれた第一生命本社ビルなどを訪ねる東京探検、元乗組員・大石又七さんにご案内いただく第五福竜丸見学会（1993年～）、

鳩山会館・護国寺見学会(1996年~)に次ぐ4番目のフィールドワークだった。「保護者」枠には友人たちも参加した。戦時下の慶應に学び、神戸大空襲をくぐり抜け、戦後は岩波書店で長く編集者をつとめた竹田行之さんは入壘後の感想を一言「壮大な無駄」と述べられた。

新井先生も竹田さんも大石さんも亡くなられた。2019年3月以来4年ぶり19回目の見学会を2月27日に行う。地下壕を無駄だという「戦後」をこれからも続けていくために。

寄稿

桜花を捧げる知覧高等女学生の写真に思う

副会長 亀岡敦子

2002年7月、岩波ブックレット『いま特攻隊の死を考える』が全国の書店に並んだ。白井厚先生と登戸研究所の調査をしている法政第二高等学校教諭の渡辺賢二氏、そして無名の私の共著書だ。私にとって50歳代半ばにして初めて、出版会社、しかも岩波書店という老舗中の老舗から、自分の書いた文章が本として出版してもらえるなどと、夢のような出来事だった。白井先生は「第1章 特攻隊とは何だったのか」、私は「第2章 特攻隊員・上原良司が問いかけるもの」、渡辺氏は「第3章 若者は特攻隊員の死にどう向き合うか」を担当した。バブル崩壊頃からじわじわと増え始めた特攻隊を賛美するような出版や映像に危うさを感じ、特攻隊と特攻作戦というものを正確に伝えるために、この本は出版された。

最初の原稿は不出来で、全面書き換えをしなくてはならず、自分の無知無能と向き合いながらの数か月を過ごしたが、最後にきれいに仕上がった本を手にしたときは心から嬉しかった。特に表紙は毎日新聞社の有名な写真で、セーラー服にモンペ姿の数人の少女が、うつむき加減に、そこだけ桜色に色付けされた桜の枝を、まるで捧げるように持つ後ろ姿を撮影したものだ。すぐ近くの特攻機の操縦席には敬礼する特攻隊員の姿があり、小さく写る遠くの機影の傍には見送りの人影が見える。ここは陸軍知覧飛行場で、少女たちは知覧高女の女学生とのキャプションがついている。私が『いま特攻隊の死を考える』に書いた上原良司も

1945年5月11日知覧基地から沖縄へと特攻出撃し還ってこなかつた一人だ。私は見送りの少女たちが、その枝をふるのではなく、まるで祈るように右手を伸ばして捧げ持つ姿に胸を突かれた。誰一人表情は写っていないのに何故こんなうつむき加減の悲しい後姿をしているのだろうか、私は気になって仕方がなかつた。その謎は間もなく出会つたひとりの女性が下さつた本、知覧高女なでしこ会編『知覧特攻基地』(話力研究所・初版1979年2月)を読んで氷解した。その女性は、まさに桜枝を持つ少女たちのひとりで、たまたまこの写真には写つていなかつたのだ。この3年生に進級したばかりの14,5歳の少女たちは、1945年4月から5月まで



『岩波ブックレット No.572
いま特攻隊の死を考える 白井厚編』 より

続いた、陸海軍合同の断末魔のような沖縄特攻総攻撃のために、全国から知覧基地に集められた陸軍特攻隊員の世話係を命じられたのだ。もう軍だけでは人手不足になっていたから、洗濯・掃除・食事の配膳などを女学生に押し付けたのだ。工場労働や、農作業の手伝い以外に、このような勤労学徒動員もあったことを、この本で初めて知った。私がなんと酷いことかと思うのは、明日死にゆく若者の世話を、感受性の強い少女にさせたその無神経さと非情さだ。

『知覧特攻基地』は「1 特別攻撃隊員の遺稿／2 飛行戦隊員の遺稿／3 女子勤労奉仕隊員の記録／4 とこしえに／5 知覧基地出撃特攻隊・戦隊戦没者名簿」で構成されている。第1章と第2章の遺稿は、実際に基地内で託された日記や遺書、また少女たちが預かり無検閲のまま家族に届いた手紙などが載せられている。第3章は、女学生たちの日記や、基地での日々の出来事と感想が、克明に描かれている。中には、隊員の依頼で最後の日々を家族に書き送り、それに対しての丁寧なお礼の手紙が掲載されている。彼女たちはどんなに心を込めて特攻隊員と接し、心を込めて作業をしたのだろう。この章では、決まりきった遺書には書かれていない死を前にした隊員の姿を見ることができ、よけいに胸が痛む。第4章は女学生時代でもおそらくクラスのまとめ役であり、『知覧特攻基地』の編集でも中心となった赤羽礼子さんと永崎笙子さんが、知覧基地の歴史や当時の様子を鮮やかに記したものだ。その記憶力と的確な描写力に感嘆する。第5章は、知覧から出撃し戦没した振武隊員の名簿である。私が関わり続けている第56振武隊の上原良司の名前も載っている。上原良司が知覧基地に着き、5月11日に出撃したころは、女学生の勤労奉仕はもう終わっていたが、「なでしこ会」のメンバーは、知覧基地から出撃した特攻隊員の遺族と心を込めて交流をしている。桜の枝を捧げる少女たちの写真は、1945年4月12日、第2次総攻撃の日に知覧基地でおそらくはプロカメラマンによって撮影されたものようだ。基地内には報道班員や映画班もいた。日記によると、前夜はお別れ会で、少女たちは9時まで給仕を許されて、「空から轟沈」という歌を歌い続けたそうだ。明日死にゆく特攻隊員にとって妹のような少女が基地にいてくれて、最期の時がどんなにか慰められたのではないか。隊員たちはみな優しくて紳士だったと少女たちは書く。しかし、少女たちにとってあまりに厳しく悲しい体験だったのだろう、この本はこう締めくくられている。「運命のめぐり合わせとでも申しましょうか、この変転極まりない、ゆれ動く時代に生まれ、その中で育った私たちの記憶の中に強く刻みこまれました心の軌跡は、いつまでも消え去ることはないでしょう。私たちは、それぞれこの哀しく重い宿命を背負って、これからも生きつづけるに違いありません。」

なでしこ隊の少女たちは、戦争で命を落としはしなかつたし、けがもしていない。ほとんどの女学生は戦後、それぞれの道を歩み、多くは家庭を持ち子どもも持ったであろう。しかし、普通の市民生活をおくっていたその心の底に「哀しく重い宿命」が沈んでいるのだ。

なんと苦しく悲しいことか。それを抱えて彼女たちは「生きつづけた」に違いない。私は上原良司の2人の妹から、歳月は悲しみを癒さない、ということを教えられた。そして心に傷を受けるのは身内だけではないことも、多くの縁の人たちの言葉から知った。歳を重ねた私にこの先できるのは、声高に発言しない普通の人たちが戦争で受けた傷を忘れられないように、私の手にあう方法で、丁寧に伝えていくことだと思う。



サザンカの花

(慶應義塾大学経済学部白井厚ゼミ会報
『創世49号』より転載)

新聞記事 産経新聞 神奈川版 2022.9.28(水)

水曜日

産経新聞

<第三種郵便物認可>

慶太地下に眠る旧海軍施設

昭和19年、日本海軍は太平洋上での戦いで立て続けに艦船を失い、不利な状況に立たされた。主な部隊をまとめる連合艦隊司令部

艦船が少なくなり

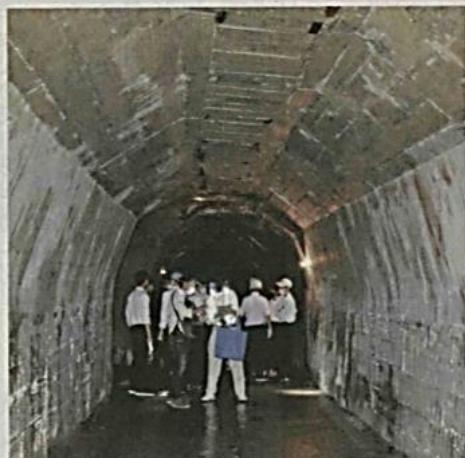
は、これまで海上で部隊を指揮していたが、艦船が少なくなり、地上に拠点をつくることになった。

横浜市港北区の小高い丘にある慶應大学日吉キャンパスは、イチョウ並木が美しい緑豊かな場所だ。第二次世界大戦が終わるまでの約1年間、旧日本海軍の連合艦隊司令部が、ここで海上の作戦を指揮していたことは、あまり知られていない。当時の様子を今に伝えるのが、地下に眠る総延長5キロ以上の海軍の施設だ。



慶應大学日吉キャンパス地下の旧海軍施設に通じる入り口=いずれも横浜市

特攻隊 若者に出撃命令も



旧海軍施設を見学する高校生=7月

大本営も横須賀市の軍港から近い、慶應大学の敷地だった。司令部は19年9月、学生の寄宿舎だった建物に移つた。また、空襲に備えて約30㍍の地下を掘り進め、作戦室や司令長官室、電信室などもつくった。最も広い作戦室は高さ約3㍍、幅約4㍍で、そばで約200人の兵士が戦地から通信を受けていた。



阿久沢武史さん=5月

連合艦隊司令部 海上作戦を指揮

「特攻隊の出撃命令もこから出され、本当なら大学ぶはずの若者たちが爆弾を積み、アメリカの軍艦に突つこんでいった」と話すのは「日吉台地下壕保存の会」会長、阿久沢武史さん。安全な地下施設にこもって無理な作戦を命じる司令部に、海軍内部から「穴から出でこい」との批判も出たという。



横浜総局

〒231-0015
横浜市中区尾上町
6-87-3電話 045-681-0921(代)
FAX 045-224-6856
yokohama@sankei.co.jp

広告 03-3275-8663

講読申し込み・
配達・集金

0120-34-4646

紙面・記事

0570-046460

Web

<https://www.sankei.com/region/>

(29日) 10月4日 (赤口)	
月齢	3.2
日出	5:34
日入	17:29
月出	8:45
月入	19:21
満潮	6:52
干潮	18:29
中潮	0:36
	(東京)

あすのくよみ

聞き取り

日吉の連合艦隊司令部勤務、元中尉・上野賀平さん(100才)

文責 運営委員・山田譲

上野賀平(しげなり)さんは、大正10年(1921年)6月21日生まれ、現在100才の方です。連合艦隊司令部に将校として勤務されていました。今年6月25日にお孫さんと日吉の定例見学会にいらっしゃいました。歩行は不自由ありませんが階段は無理とのことで、地下壕には行かず地上の建物をご案内し、寄宿舎にもお連れしました。その後、ファカルティ(職員食堂)でガイドメンバーとお話しいただきました。その時、うかがったお話を報告いたします。

——聞き手: 山田譲

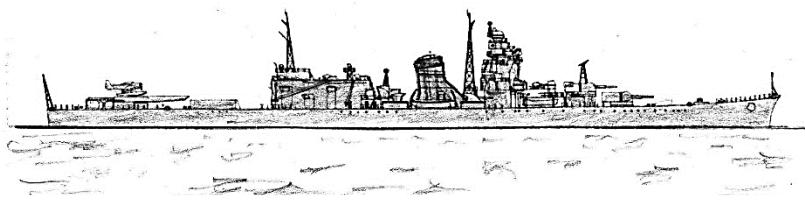
ファカルティでは岡本雅之、亀岡、喜田、上野、田中、佐藤由香、酒井、小野も参加

(1) 上野さんの軍歴

上野さんは鹿児島県指宿の温泉旅館の家に生まれて祖父母に育てられ、高等専門学校で学んだ後、海軍を志望し昭和18年10月に予備学生として入隊しました。三重航空隊で訓練を受け、偵察機の偵察員の機上訓練を受けました。空中警戒や機銃の訓練で、操縦訓練はしませんでした。偵察機は機上練習機「白菊」とは違う飛行機でした。

昭和19年2月に連合艦隊司令部航空参謀付きとして横須賀で戦艦武藏に乗り込み、パラオに向かいました。（その時の司令長官は古賀峯一長官でしたが、3月31日に古賀長官はパラオからフィリピンのダバオに移動する途中で飛行艇が遭難し、司令部参謀とともに戦死してしまいました。）

上野さんはトラック島に移動し、そこから二式大艇（大型飛行艇）で東京に向かいました。しかし東京湾で着水に失敗し、右翼とエンジン1台が破損しました。その時トラック島から同乗してきた少佐が「学生、続け！」と言って脱出し、アンテナ線につかまって2時間位したら、救助のボートが来ました。まだ4月の海で寒く、自分は指揮官という立場でしたが何もわからないガキだったので、あの少佐がいなければダメでした。上陸したのは水上機引上げ用のスロープが岸にある飛行艇基地（横浜航空隊？）でした。少佐はさっさと降りて「帰るぞ」と言って行ってしまいました。誰だったのか、わかりません。



軽巡洋艦 大淀

そこから東京に行き、司令長官正式補任前の豊田副武長官の連合艦隊司令部で勤務しました。5月に木更津で巡洋艦大淀に乗艦し、5月31日に少尉に任官しました。大淀は広島県の柱島にいることが多く、木更津にはあまり来ていません。護衛の駆逐艦が4隻ついていました。徳島の

金毘羅さんの前を航行する時は、お賽銭を海に投げました。するとそれを漁師が持っていました。

9月24日に木更津沖から大淀は出航し横須賀に行き、日吉へはたぶん自動車で来ました。電車ではなかったと思います。その後はずっと日吉にいて終戦の時は23才で中尉でした。

(2) 司令部では航空参謀付きの勤務

職務は情報関係です。航空参謀付き士官として、通信室から上がってくる電報を整理して資料にして参謀にわたすのが仕事でした。しかし機密性の高い電文は、自分は扱いませんでした。

はじめに戦艦武藏にいた時は、古賀長官はのんびりしていました。漁師だった兵隊に餌を



上野賀平（しげなり）さん

2022.6.25 チャペル前にて

つけさせて釣りをしていました。自分もいいものを食べていて、はじめて洋食を食べました。ナイフ、フォーク、バターナイフが並んでいました。偉い人から順に従兵が3人で一品ずつ料理を運んできます。自分はガルーム(少尉、中尉の部屋)で食事し、大尉以上は士官室で食事します。居室は大きな部屋で予備学生と2人だけでした。戦艦武蔵にはエレベーターがあり、艦橋にもレーダーのところにも行きました。レーダーははっきり映らなくて「映っているのは、あの島だろうなあ」という程度でした。

大淀になると「大和ホテルと大淀食堂」と言わされていて、食事は戦艦武蔵とは大違いでした。水上飛行機の収納庫を改装した所が司令部、作戦室でした。武蔵では機銃も1台で3門の機銃ですが、大淀では1台に1門だけで、それで向かってくる魚雷を射撃します。魚雷発射装置のある所は通路がなくて、そこで人が海に落ちて流されたりしました。

日吉では北寮3階の真ん中あたりの部屋にいました。1人1室でロッカーもあり、そこで勤務し電報が届きます。何々が沈没したとか、犬吠埼を偵察して「異状なし」とかいう報告を作戦部に出します。「鹿屋基地、彗星(艦上爆撃機)保有86機、稼働2機」という電文が来て、翌日になると「保有85機、稼働1機」というのが来ました。また航空部隊が大敗した後でも、「被害僅少」とか「航行可能」とかという電報が来ました。

作戦計画を1回だけ立てたことがあります。飛行艇でトラック島まで敵に会わないので荷物を届けるコースを決めるように言われました。記録を調べてコースをつくりましたが、実行したかどうかはわかりません。

自分は夜の仕事が多くて、昼夜なしで夜2時位に寝ていました。ですので朝礼には出ません。軍艦旗掲揚は朝8時で、まだ寝ていました。食事は食堂で食べましたが、どこの建物だったか記憶がありません。北寮には食堂はありません。回りは偉い人ばかりで大佐などがゴロゴロいるから、あまり偉いとも思いませんでした。失敗したこともあり、少佐が入ってきてもポカーンとしていて「何か用ですか?」と言ってしまいました。

航空参謀の淵田美津雄大佐の部下で、歴代司令長官や高級参謀とも会っていました。長官の車は錨マークに0が3個ついた旗がついています。何かの時、自分が乗って出かけたらみんなが敬礼するのだけど「やけに若いのが乗っているなあ」と言われました。階級によって車の敷物の色が違います。将官は赤、佐官は黄色、尉官は青です。下士官が運転しました。

地下の作戦室では陸海軍合同会議がありました。降りていったら陸軍所属の三笠宮が台の上に立っていました。「あちらでお休みになつたらいかがですか?」と言ったら、「けっこう!」とポンと言われました。通路から2~3mの3段位上がった所に立っていました。地下での会議に行ったのは、その一回です。

地下作戦室の壁は木の板ではなかったと思うがよくわかりません。地下に降りるときは駆け足です。ゆっくり歩くのは若手将校には許されません。軍艦の中では階段は駆け足です。でも登りは歩いたんじゃないかと思います。125段だったと思います。横須賀まで書類か何かを届けに行ったこともあります。ガソリンがないので荷馬車を借りるために陸軍に行きましたが、どこの部署だったか。馬の餌が必要ですが餌がないので「餌をください」という話もしました。結果がどうだったか、おぼえていません。

(3)日吉での空襲体験、生活

空襲があった時は「総員退避」「全員地下へ」の声が聞こえなくて、当番の下士官がぐるっと回ってきて「総員退避!」というのを「うるさいぞ!」と言ったら、「アレッ、まだいるぞ」と言われました。服を着る暇がなくてカッパでごまかしました。中寮の前で地下壕の階段の方に行こうとしたら、シャーと焼夷弾の落下音がしました。そしたら背中を叩かれました。背中が燃えていました。そんなことがありました。

空襲警報のサイレンは聞いたことがありません。東京の方の空襲を見て、すごいなと思いました。空襲の時は、落ちるのは日本の飛行機ばかりでした。B29は交代交代で来ます。それを見ていました。北寮からは富士山が見えました。風呂は丸い湯船でぜいたくだなあと

思いました。下にボイラーがありました。入浴の順番は士官、下士官、兵士の順です。偉い人は別です。仕事で遅くなり行ったら下士官が入っていて、下士官が兵隊に「洗ってさしあげろ」というので数人がかりで洗われて、恥ずかしかったことがありました。

ニワトリや七面鳥を寄宿舎で飼っていたのかどうかは、自分は見ていません。第一校舎はおぼえていますが、第二校舎はおぼえています。女性の理事生は2人おぼえています。1人は北中という戦友の妹で、まだお元気で93才か94才です。もう1人は鷹司宮家の娘さんです。モンペをはいて廊下をモップ雑巾（？）でスーと掃いていました。「鷹司でございます」と言うので、他の人に「お公家さんみたいだな」と言ったら「あれは本物だぞ」と言われました。上着は女学生の服だったようです。【第一校舎で海軍人事局航空配員係に勤めていた立川重子さんは、鷹司家の娘さんが写っている日吉での集合写真をお持ちでした。】

給料は少尉で70円。中尉で75円でした。残金がいくらという紙は見ましたが、現金で受け取った記憶はありません。郵便局は（第一校舎に）ありましたが、郵便貯金にした記憶もありません。終戦間際に中尉への昇級祝いをした時、海軍宿舎での宿泊料が4円、食事代が2円50銭だったように思います。

昭和19年の2月に武藏に乗って、3月に給料をもらいました。軍刀をつくらないといけないので、「お金を送ってくれ」と頼みました。将校はみんな軍刀を持っていました。白木の鞘の人もいました。

特攻に出撃する人も短刀をもらっていました。白木の鞘で刃は15cmと短い。こんなので戦うのかよ、という感じでした。特攻なんか自分は反対だけど、反対とは言えません。死ぬだけです。自分の軍刀は戦後、新国劇の俳優の島田正吾という人にあげました。芝居で使います。

(5) 「玉音放送」と終戦のこと

8月12日の晩に淵田航空参謀から「負ける」と聞きました。15日の「玉音放送」は各自、仕事をしている所で、自分は部屋で整列して聞きました。その後、書類をいっぱい燃やしました。必要なないものまで丘の上の芝生の所で燃やしました。機密の厳しいものは丘の下の方で燃やしました。

9月まで日吉にいましたが、米軍は見ませんでした。その後、戦犯で引っぱられるという情報があり、鹿児島へは戻らず東京で遊んでいました。家族は自分が東京にいるのは知っていました。海軍経理学校にいた人と知り合いで家族に知らせてくれました。11月になって鹿児島に戻っても大丈夫だというので帰郷しました。

造船会社で座礁した船を引き上げて外板を直したり、ディーゼルエンジンの改造をした



上野さんが勤務した寄宿舎北寮

(2010年撮影)



戦時中の中寮、北寮のスケッチ（作者不詳、司令部員だった土方貞彦さん提供）

りしていました。そのあと教師をやったり、鉄工所の仕事とかやりました。今は鹿児島で1人暮らしで、食事はおかげを買ってきて食べています。

(100才のお祝いで、お子さんたちが全部手配してくれて飛行機で羽田に到着。孫が7人で鹿児島、大阪、藤沢、川崎にいます。同行したお孫さんは藤沢在住。——その後、連絡をいただき藤沢の高齢者施設に入所されたそうです。)

(註)

連合艦隊(海軍総隊)司令部の所在地と司令長官、航空参謀の変遷

1944年(昭和19年)3月31日まで 戦艦武藏——トラック島、パラオ群島

司令長官・古賀峯一大将 航空甲参謀・内藤雄大佐 航空乙参謀・小牧一郎中佐

同年5月1日より 軽巡洋艦大淀

司令長官・豊田副武大将 航空甲参謀・淵田美津雄中佐 航空乙参謀・多田篤二少佐

同年9月29日より 日吉に移転

1945年(昭和20年)4月25日より 海軍総隊発足

司令長官・豊田副武大将 航空甲参謀・淵田美津雄大佐 航空乙参謀・中川俊少佐

同年5月29日より

司令長官・小沢治三郎中将 航空甲参謀・淵田美津雄大佐 航空乙参謀・中川俊

(中島親孝著『聯合艦隊作戦室から見た太平洋戦争』より)

感想文

長野担当クラス地下壕見学会

文責 第15期ガイド養成講座受講者

慶應高校英語科教員 長野智佳

2021年11月30日(火)・12月9日(木)

・靖国神社の遊就館やひめゆりの塔などの様々な戦争遺跡や博物館に行ったことがあるが、自分がそのような戦争遺跡で授業を受け、日常的に利用していることに驚いた。戦争で沢山の人々が亡くなる瞬間をレシーバーで聞いていた人、特攻の命令を下した人そのような方々の気持ちを想像すると、自分がどれほど幸運があるかを実感した。英語の授業で戦争についてここまで深めるとは思っていなかった。世界の皆んなの人が宗教や言語を学び、相互理解を深めていくことで、もっと平和な世界になっていくと思う。そのためにも自分の国の歴史や英語圏の文化、言語、歴史についてさらに深い学習をしていきたいと思った。(2年S.Y.)

・地下壕内の換気の仕組みや排水の構造が非常に高度であり、70年前に、しかも3ヶ月で作成されたことに驚愕するとともに、戦時中の日本を生きた人たちの苦労がひしひしと感じられた。またほぼ当時のまま現存している様子から歴史を後世に残す意思が示されていて、自分にも戦争の悲惨さを語り継いでいく責任があるのだと改めて考えさせられた。(2年Y.H.)

・見学する前は軍の司令部である所が受ける集中砲火に耐えられるのかと疑っていた。しかし実際見学してみると、壁は分厚く、地下30mにあつたりと、空襲に耐えられる所だとわかった。だがそれと同時に特攻を命ずる司令部が前線ではなく、安全な所にいる事で兵士からの不満があるなど、この地下施設の背景の状況も知ることができて面白かった。(2年K.T.)

・全体に話して下さった戦艦大和は行きの燃料だけ詰め込んで敵地に向かったと仰っていたのがとても印象に残った。文字通り死ぬ気で敵地に向かったことがわかり戦争の残酷さが伝わった。また灯りを消して真っ暗闇の中が初めての経験だったので驚いた。（2年A.K.）

2022年 9月25日（月）・26日（火）

【設問】「自分にとって一番価値があった学びはなんですか？」

- ・戦争の跡は自分の身近な所に溢れていて、自分はそのような環境で学び、生活することができているということ。（1年S.T.）
- ・自分達と同じ年代の人間が戦時中には自ら志願して、通信兵となったことについて学び、自分も何かできることはないかと考えた。（2年N.T.）
- ・当時地下壕では自分たちの年齢と同じ、もしくは自分達より若い人たちが働いていたと聞いた。彼らが聞いた特攻の際のモールス信号の音と近いものを聴いたが、ツーという音は自分の心さえ動かすものをあったのだから、当時の学生たちはどんな思いでこの音を聞いていたのかは想像を超えるだろうと思った。改めて戦争に若い人たちが参加することの悲惨さを感じた。（2年T.K.）

【設問】「日吉台地下壕とその周辺の戦争遺跡をどのようにしていくのがよいとあなたは考えますか？」

- ・今の時代にまで残っている貴重な戦争遺跡はこの先の人々に伝える為にも残しておくべきである。恐れるのはその遺跡、出来事を知っている人がいなくなってしまうということ。ガイドさんは年配の方が多かったのでこの先の時代に生まれてくる人たちに伝えられるのは僕たち若い人だと思うので、この貴重な話を聞いて実際に経験した僕たちが今度は先の世代に伝える役目があると思う。（2年T.K.）
- ・3Dのデータにし、VRを使っていろんな人に体験してもらう。日吉祭などで外部の人にも知ってもらえるように情報を展示する。（2年S.Y.）
- ・「保存」するのではなく「活用」するべきだと思う。年間を通じて温度を保ちやすい環境などを活用してできることはたくさんあると思う。地下壕を「負の遺産」だけではない施設に変えていくべきではないか。（1年T.S.）

新米ガイドの決意

第15期ガイド養成講座受講者 小野由紀

日吉台地下壕保存の会への参加は、今年度のガイド養成講座以前、いえ肝心の地下壕見学よりも前、昨秋のガイドのための勉強会から始まりました。

あの日のことは忘れられません。戦争遺跡の話題も興味深かったのですが、驚かされたのは、会の前後でした。準備から片付け・・・全員がテキパキと動かれるのです。新参の私がまごまごしているうちに全て終了。帰り際も鮮やかに、用があれば残り、なければサラリと帰る。なんと気持ちの良い会でしょう！

この印象は、実際に日吉台地下壕の見学会に参加し、強まりました。役割分担が明確で平等。もちろん言うべき事は、きちんと伝え合っての上です。凄い！

やがてガイド養成講座で、諸先輩の想いを聴く機会がありました。淡々とした口調にも、戦争遺跡・保存の念、つまりは平和を願う気持ちがまっすぐに伝わってきます。これこそが、会の良い雰囲気を作っているのだと、納得できました。

日本の戦争の記憶は薄していくのに、異国での戦争報道は絶えません。まずは日吉台地下壕の存在を周囲に伝えていくつもりです。知ることが、これからにつながる・・・そう信じ、新米ガイドは、先輩方の後を必死についてまいります！

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座を受講して

第15期ガイド養成講座受講者 矢野俊秀

数年前に日吉地下壕を見学する機会に恵まれ、それ以来気になる場所でした。ガイド募集の案内を拝見して、還暦を迎えた私は、二度と悲惨で無謀な戦争を繰り返さないため語り部になろうという誘い文句に惹かれました。うまく話せるかわからないけどやってみたい。

講座を受けるにあたり、近代史を学ぶ学生に戻った気分で受講し、戦争の不条理が学べました。日吉の地で、戦艦大和が沖縄に向か航行中、徳之島沖で沈没していく様子を受信していました。特攻機からの無線信号が途絶え電信員が涙していました。

この講座を受講して、改めて悲惨な戦争を繰り返さないと強く思うとともに、世界に目を向けると、ウクライナが戦禍に巻き込まれ、涙する子供たちを見ると、なんとかしたいという衝動にかられます。また、「力まず自然体でいいですよ」と言うボランティアでガイドを務める諸先輩に敬意を表したいです。今後もこの活動に携われるよう頑張ります。

報告

あらたな記録・伝承方法として3次元モデルをためして
～戦跡の「見学」から「観察」へ～

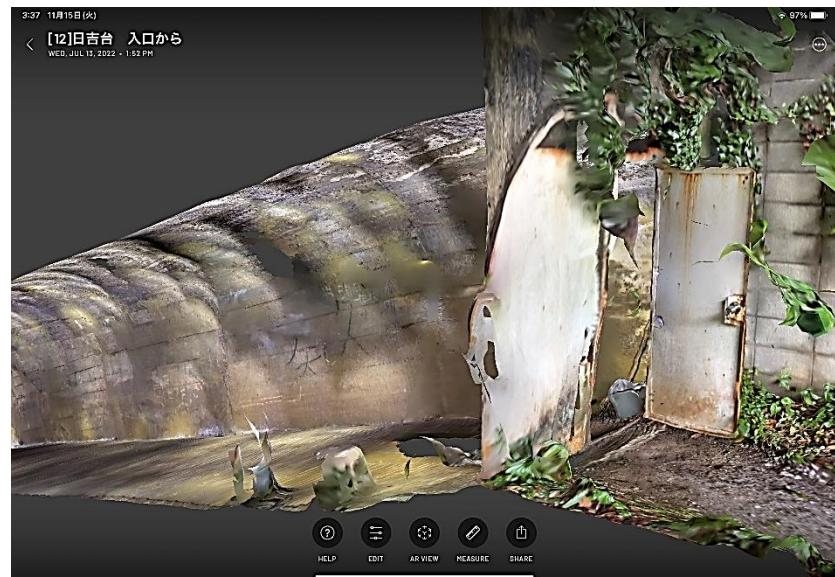
ガイド 中田 均

「iPhone や iPad があれば 3次元モデル が誰でも撮れる時代になっています。これまで、一般市民の方は戦争遺跡を見物に行っておしまいという形でしたが、実際にその地に行って 3次元モデル を撮って、それを Web 上で公開することで自分自身が保護活動に直接に関与することが可能になって、戦争遺跡に対して敷居が低くなっています。市民参加型の戦争遺跡の保護活動が実現できます。」（鈴木慎也 東京高専准教授 浅川地下壕の保存をすすめる会 講演会「3次元モデル化の可能性」2022/10/15 から）

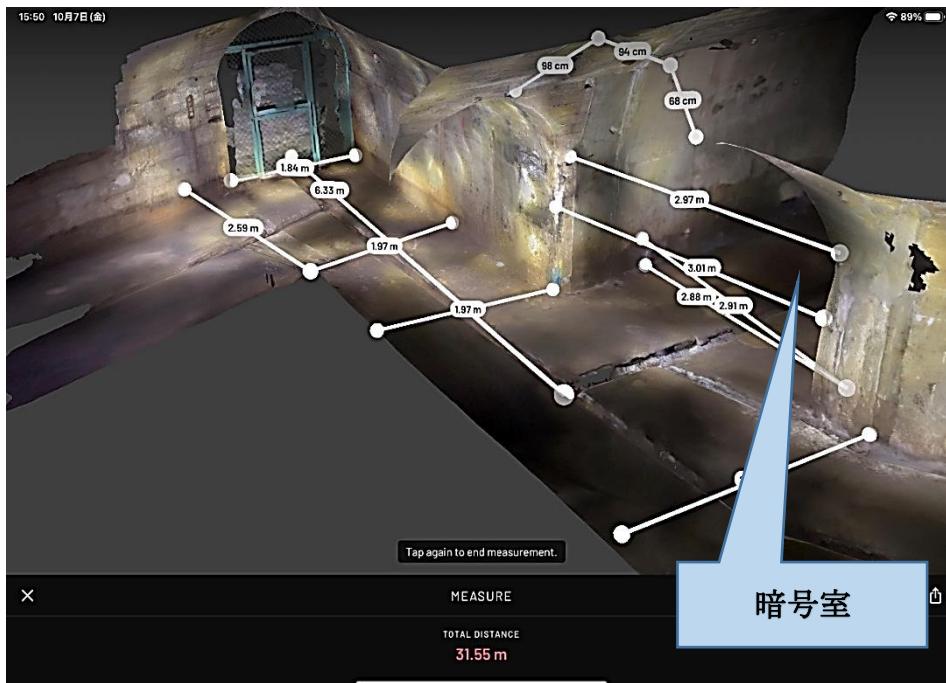
これまでガイド学習会で3次元モデルについて報告してきましたが、少しづつですが学習しています。3点、あらためて報告いたします。

(1) 第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会 第二分科会 2022/8/21
「あらたな記録・伝承方法として3次元モデルをためして」 中田 均 報告の要旨

「iPad Pro」（アップル）でいくつかの戦争遺跡を試行錯誤で撮影して来ましたが、北海道のトーチカや沖縄の石彫大獅子などあまり大きくなく地上の明るい環境で撮影できた場合は、満足する3Dモデルになりましたが、5メートルを越えてレーザーが届かなかった沖縄のひめゆりの塔や白梅之塔などは撮影できませんでした。収穫があったのは、沖縄のガマや沖縄師範健児之塔・納骨堂でした。暗くて狭くて写真撮影もうまくできない地下にあるガマで何が起こっていたか、証言や資料など読みながら立体的な3Dモデルを見ることでリアルで悲惨な戦争を想像することができます。



3D画像：連合艦隊地下壕入口と下り坂道



3D画像：暗号室手前の通路

戦争遺跡と接することが出来ると考えます。

(2) 日吉台地下壕の3次元モデルについて 2022/7/13(水)撮影

撮影箇所 … 地下壕出入口～急な坂、機械室、バッテリー室、電信室、作戦室 など
【撮影してみての雑感】

北海道トーチカがきれいに撮れたのに対して、沖縄のガマや浅川地下壕は岩肌がゴツゴツしているので3次元モデルにするとぼやけた映像になってしまいました。レーザー光線の反射のせいだと思います。なので、コンクリートで巻かれている日吉台地下壕は、明瞭な映像を撮影することが出来ました。地面の側溝跡、構築したときの壁や天井の板のあと、バッテリーなどが置かれた台座、換気扇穴、電気配線跡、碍子など。特に出入口の急な坂に残る数カ所の足跡が撮影できて満足しています。さらに、撮影した3次元モデルから、i pad pro の機能を使うと、距離の測定も簡単にできました。今後の課題としては、撮影時、広い範囲でライト証明がとどけば、均一に照らされてさらにきれいな3次元映像が出来るでしょう。これまで撮影した日吉台地下壕の3次元モデルは、残念ですが紙面では掲載できませんので、写真にしていくつか掲載しましたのでご覧下さい。

(3) 三次元モデル公開サイト

三次元モデル公開サイト「Sketchfab」や事例もサイトで見られます。以下、サイトをご紹介しますので、ご自宅のパソコンでご確認下さい。

①三次元モデル公開サイト Sketchfab <https://sketchfab.com/>

②九州大学：沈没の米軍艦の三次元モデル化（浅海底フロンティア研究センター）

<https://isgs.kyushu-u.ac.jp/~seafloor/uss-emmons/>

③NHK：小笠原諸島の戦跡の三次元モデル化 WEB特集「フォトグラメトリーで戦跡を記録」

<https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0019/topic086.html>

④中日新聞 戦後77年特集「語り続ける戦争遺跡」

https://www.chunichi.co.jp/feature_pages/war_ruins

摩文仁の丘にある沖縄師範健児之塔・納骨堂を3Dモデルにすると健児之塔の隣にある3人の男性像「平和の像」とその地下にある納骨堂が真下に位置していたことが視覚的に認識できました。3Dモデルでその深さを測ると9メートル以上の深さがあることがわかりました。戦争遺跡を調査した報告文に地図や表、写真などの資料を加えて報告するスタイルに、あらたに3Dモデルという強い味方が加わってきました。3Dモデルを有効に活用することで、戦争遺跡の調査・保存活動に寄与できるし、次世代への伝承においてはアニメやゲームで育ってきた若い世代がリアルに

追悼文

海軍通信兵・近藤恭造さん

運営委員 遠藤美幸

2022年11月10日に海軍通信兵の近藤恭造さんがご逝去された(享年93歳)。近藤さんは2014年に軽巡洋艦「多摩」の慰靈祭で知り合って、その後、2016年3月に日吉キャンパスにお招きして、第10期ガイド養成講座にて貴重な戦場体験を話して頂いた。

近藤さんは、最後の連合艦隊司令長官・小沢治三郎中将指揮下の小沢艦隊(第1機動艦隊)の航空空母「瑞鶴」の通信兵で、日吉台地下壕とも縁の深い方である。海軍生活から瑞鶴の撃沈時の体験など、めったに聞けない貴重な話を聞けた。その後も日吉に何度も足を運んで下さり、当会の活動をご支援頂いた。

満14歳で「海軍特年兵」に志願した近藤恭三さん。わずか15歳でレイテ沖海戦で撃沈された瑞鶴に乗船していた。1944年10月25日、退艦命令が出て、近藤さんは着衣のまま海に飛び込んだ。沈没時に生じる渦に巻き込まれないように必死に泳いだ。瑞鶴は垂直に直立して一気に沈んだ。沈没後、海中で2度爆発。心臓が破裂しそうな爆音に死を覚悟し、海に漂う木材に必死にしがみついた。周りでは一人、また一人と力尽きて……。最期は「お母さん」と叫びながら海に消えていった。

瑞鶴には1600名が乗船し、3分の2が戦死した。近藤さんの同期50名のうち瑞鶴に配属された10名で生きて帰れたのは近藤さん一人。近藤さんは「90歳を超えて『お母さん』と叫んで逝った少年たちの叫び声が忘れられない」と語る。

誠実なお人柄で、「命ある限り戦場体験を若い世代に伝えたい」といつも話されていた。直接話を聞いた者として次世代に伝える「責任」を感じている。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

150号達成記念原稿を募集します!!

会報第1号が発行(1989年5月10日)されてから、今年の6月17日で150号の発行をすることが出来ました。そこで会員のみなさまに150号達成を記念して、会への思いをお寄せいただきたく、原稿を募集致します。200~400字程度で、1/30

(月)迄にご送付よろしくお願い申し上げます。会の更なる発展のためにも、多くの皆様の一言をお待ちしております。次号(153号)以降、随時掲載の予定です。

送り先:

郵送 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 亀岡敦子 宛

or

メールアドレス fujisunset-0124@cilas.net

会報編集長 小山信雄 宛



「戦死者の供養のために伝えたい」と語る近藤恭造さん

2016.3.12 第10期ガイド養成講座にて



ナンテンの赤い実

☆活動の記録 2022年9月～11月

9/17(土) ガイド養成講座第4回 修了者4名 (日吉地区センター)

9/22(木) 会報151号発送 (来往舎小会議室)

9/24(土) 定例見学会 ★台風接近のため中止

9/26(月) 慶應高校 長野先生授業見学会

午後2回 33名+35名

9/27(火)〃午前2回 31名+34名

10/6(木) 運営委員会 (来往舎小会議室)

10/10(月) ガイド学習会・PowerPoint 実習
(日吉地区センター)

10/15(土) 日吉地区センターの設置講座

- ・日吉台地下壕についてPowerPointで説明
- ・「戦争の記憶を次世代に伝える<学徒出陣と特攻作戦>」受講者20名

10/22(土) 定例見学会 29名 (日吉地区センター講座受講者20名+9名)

☆日吉地区センター設置講座は毎年40名で座学と見学会を行っていましたが、コロナ対策で、単独の見学会不可のため、半数の20名を募集し、定例見学会に参加しました☆

11/2(水) 運営委員会 (来往舎小会議室)

11/4(金) 地下壕見学会 田園調布学園大学 10名・神奈川大学付属中学校 8名

11/9(水) 定例見学会 23名

11/19(土) 埼玉県立川越高校 23名

11/26(土) 定例見学会 31名



日吉地区センター設置講座の風景 2022.10.15

○地下壕見学会について

定例見学会は、11月から月2回行っています。

定員30名。第2水曜日・第4土曜日午後が基本です。

以下、実施予定、受付状況です。

12/14(木) 20名、 12/17(土) 30名受付済

1/11(木) 1名、 1/28(土) 30名受付済

2/4(土) 5名 (2月は入学試験のため定例見学会はこの日のみ)

3/8(木) 2名 3/25(土) 10名



日吉キャンパス銀杏並木の紅葉

☆学校関係(学術・教育)の見学は定例以外ご相談で実施しています。定員30名

★お問合せ・申込みは見学会窓口まで TEL/FAX 045-562-0443 喜田 (午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会